

## 北上川流域を中心とした大洞 A 式土器編年の再検討

小久保 竜也

## 要旨

北上川流域における縄文時代晩期後葉の大洞 A 式土器の編年には、九年橋遺跡出土資料のグリッドをもとにした検討などがある。しかし、同遺跡や周辺の本宮熊堂 A 遺跡の良好な遺構一括資料は看過されたまま今日に至っている。そのため、既往の編年と一括資料との間に生じた齟齬が顕在化している。この問題を解決するため、本稿では、北上川流域の一括資料を中心に大洞 A 式土器の編年を再検討し、施文技法にも着目しながら、大洞 A 式土器を 3 段階に区分した。その上で、調査区内での遺構の分布などをもとにこの編年を検討し、既往の編年との相違点を示した。次に、大洞 A 式土器と共伴しつつも、編年の位置づけが未解決の文様である矢羽状沈線文について、文様図形をもとに 3 つに細分した。これを踏まえ、共伴資料や同居する文様を根拠として先に設定した各段階に比定した。この結果、矢羽状沈線文はそれぞれの類型ごとに大洞 C<sub>2</sub> 式～A 式の中で存続期間が異なる一方、文様の稠密化といった類似する変遷過程を辿ることが認められた。

## 1. 問題の所在と研究の目的

東北地方における大洞 A 式土器の研究は、山内清男による大洞 B～A' 式の設定に始まる（山内 1930）。その後、山内はそれまでの大洞 A 式と A' 式の間 A<sub>2</sub> 式を追加し（山内 1964）、それらの型式設定の経緯や内容を語った（平山ほか 1971）。その後、工藤（1987）、鈴木（1987）によって工字文と変形工字文の間をつなぐ文様の変遷が東北地方一円でおおむね共通することが確かめられた。これによって大洞 A<sub>2</sub> 式の型式内容への理解が進んだ。「大洞 A<sub>2</sub> 式」という名称については議論があったものの（設楽 1991；中村 1988, 1990）、現在では東北地方内部での地域差を認めつつも、大洞 A<sub>2</sub> 式期を認める意見が多い（佐藤 2005：1）。こうした議論の中で、大洞 A 式土器は時期的な細分や東北地方内での地域差の把握が進んできた。

北上川流域における大洞 A 式土器の編年は、須藤（1997）による中神遺跡の検討、高橋（1993a・b）、品川（2003）による北上市九年橋遺跡出土土器の検討が代表的である。その後、大坂（2012：144）が東北地方縄文晩期編年について指摘した「編年対比の基準となるべき大洞編年が、文様変化に関する型式学的類推に強く依存しており、文様以外の属性の変化および蓄積されつつある一括資料との齟齬が表面化してきている」という問題がこの地域でも該当する。このような問題が指摘されている一方で、12 次におよぶ九年橋遺跡の調査や、2000 年代に報告された盛岡市本宮熊堂 A 遺跡 17・26・29 次の調査で出土した良好な一括資料は十分に評価されることなく今日に至っている。

以上のような問題を解決するため、本稿では北上川流域における大洞 A 式土器の一括資料に注目し、東北地方中部における大洞 A 式土器編年を再検討する。この際、土器の器形や文様に加えて、施文技法の変遷にも注目する。また、提示した大洞 A 式編年をもとに、これまでの研究で看過され、帰属時期が曖昧なままであった矢羽状沈線文<sup>1)</sup>の編年の位置づけと変遷を明らかにする。これによって、大洞 A 式土器の理解を進めることを目指す。

## 2. 研究史

## 2-1. 北上川流域における大洞 A 式の研究略史

北上川流域における大洞 A 式土器編年の研究は、大量の土器が出土した九年橋遺跡を中心に進んできた。

1990 年代までは九年橋遺跡の土器を出土したグリッド単位で操作する研究が中心であった。小林（1991a・b）は九年橋遺跡の出土資料を中心に用いて、大洞 C<sub>2</sub>・A 式土器の単位文様を分類した。さらに、単位文様の変遷を九年橋遺跡 B4 区と H5 区の 2 地点の層位的な出土状況を用いて根拠づけた。小林の研究で特筆すべきは単位文様を分類する際に文様の図形だけでなく、看過されることの多い施文順序や施文技法を重視し、時期差や地域差と結び付けた視点である。

高橋（1993a・b）は、九年橋遺跡を中心に大洞 C<sub>2</sub> 式を細分した研究である。高橋は後半で大洞 A 式の細分にも補足的に触れている。高橋は大洞 A 式古段階を文様帯が広く、沈線間の幅が広いものとし、大洞 A 式新段階を文様帯が狭く、沈線間の幅が狭いものとした。さらに、この二者が分布の上でも分離できること

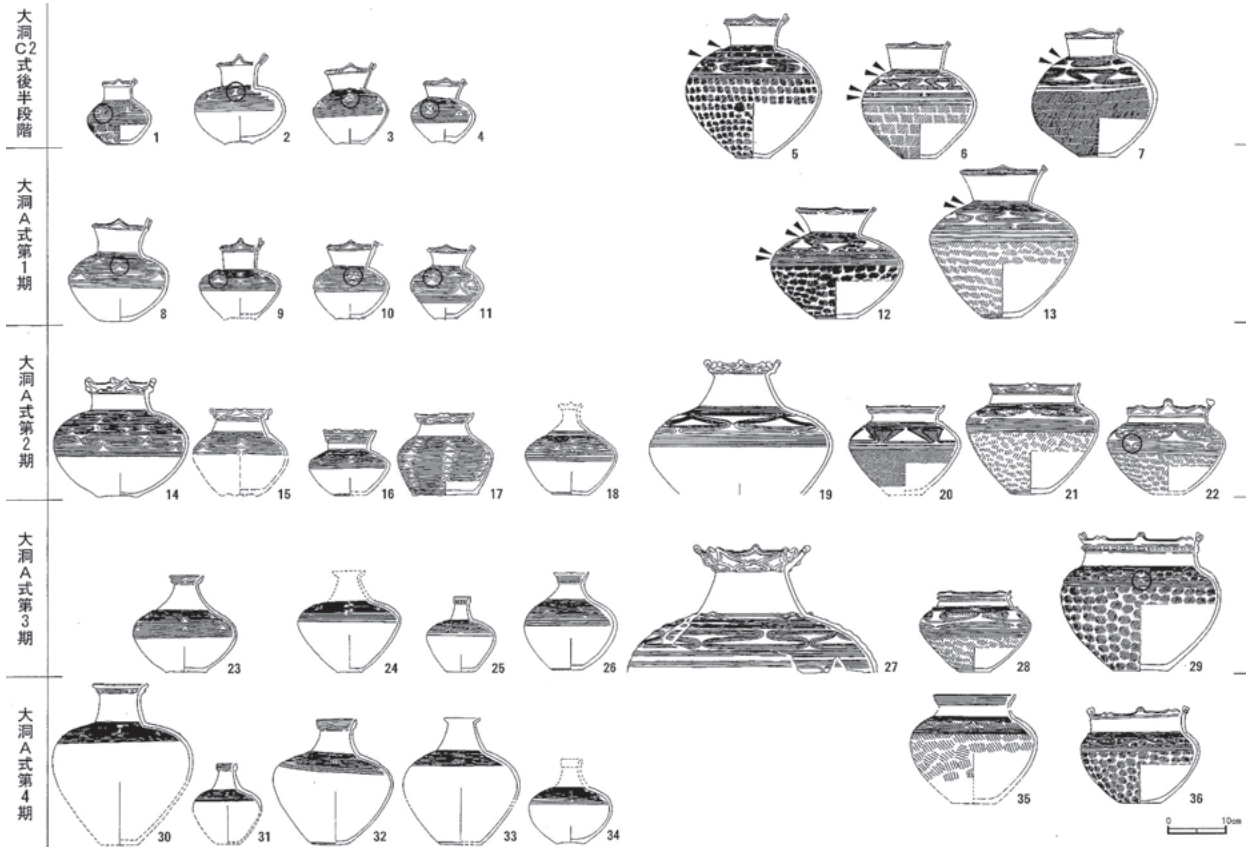


図1 品川（2003）による壺の変遷図

を示した。

九年橋遺跡の壺と台付浅鉢を中心に大洞A式を4段階に細分したのが品川（2003）である。品川は山内の記述から壺の口部装飾帯と体部文様帯の幅を型式内容として抽出し、編年を行った。この方法によって、型式内容の拡大解釈を防ぎながら、各段階の明確な指標を提示している。

この他に、東北大学により中神遺跡・山王圀遺跡が発掘された。これによって良好な層位的資料が得られたことで、東北地方中部における当該期の編年は大きく進展した。伊東・須藤（1985）は山王圀遺跡の成果をもとに、同遺跡VI層、Vc-7・m・n層、Va・k層出土土器を提示した。その後、須藤（1997）は中神遺跡北斜面包含層の層位をもとに、縄文時代5a期から5c期を設定し、山王圀遺跡の土器と対比した。なお、当該遺跡の報告書は未刊行のままであったが、近年、弘前大学北日本考古学研究中心による整理が行われている（関根2022）。今後、山王VI～V層土器も公表されることによって、大洞A式土器の理解が大幅に進むことが期待される。

その後、青森県、秋田県、山形県などで出土した良好な資料と北上川流域の資料との対比が大坂（2009, 2012）でなされている。

## 2-2. 先行研究の問題点

次に、先行研究の問題点を整理する。小林（1991a・b）は施文順序や技法を重視しているにも拘わらず、編年がほとんど図形に依る点である。したがって、施文技法を体系的に整理し、土器文様と対比させて編年することが必要である。

品川（2003）には模式図と変遷図に矛盾がある。品川は図1-1～4の壺を大洞C<sub>2</sub>式後半段階としているが、これらの土器は体部文様の平行線化が済んでいるため、大洞A式に比定の方が妥当である。また、品川が図1の変遷図の32で大洞A式第4期として挙げた壺の口縁部装飾が、模式図では大洞A式第3期のものとして掲げられている。これら時期に関する2つの問題は、口部装飾帯と体部文様帯幅では壺の時期の峻別が難しいために起こると考えられる。

## 3. 資料と方法

### 3-1. 大洞A式とC<sub>2</sub>式、A'式の異同

分析の前提として、本稿で対象とする大洞A式の上限と下限を確認する。大洞A式をC<sub>2</sub>式と区分する特徴については、山内は以下の点を挙げた。①「所謂工字文が「大洞AA'」に続き、甚だ盛行する」点、②「口部装飾帯における口外側の隆帯の発達」が見られ

る点、③「頸部文様帯と体部文様帯の配置に混乱が見られる」点、および④「磨消縄文手法の欠落傾向」である（山内1930：116-118）。このうち品川は大洞A式の体部文様を大洞C<sub>2</sub>式から漸移的に変化するものであるとして、2型式を分ける基準として①を選別しなかった。しかし、4章で段階設定を行う際に、口縁部欠損資料が多い段階があり、この場合は体部文様を参照する必要がある。したがって、本稿では体部文様も含めて大洞A式の指標とする。

大洞A式を大洞A'式と区分する特徴については多くの議論があり（佐藤2008, 2019；鈴木1985）、高瀬（2000）の「変形匹字文の沈線化をメルクマールとした変形工字文の完成を持って大洞A'式とする」など、いくつかの指標が提示されている。

### 3-2. 分析資料

分析には北上川中～上流域と、同地域に関連が深い横手盆地から出土した資料を用いる。対象とした資料の出土遺跡は以下である（図2）。

#### 岩手県北上市九年橋遺跡

北上川と和賀川との合流点近くに位置する縄文時代晩期の低湿地遺跡で、遺物の時期は晩期中葉～後葉が中心である。3-1節で確認した指標を参考にすると、大洞A'式の土器は報告されていない。北上市教育委員会による第1～11次の発掘と岩手県教育委員会による第12次発掘（佐々木ほか編1997）で住居や石囲炉、焼土、土坑、溝などの遺構と3000個体を超える復元可能な土器が出土した。本稿では土器がとくに良好にまとまって出土している1号住居址、17・18号焼土、10・18号土坑（藤村編1986, 1987, 1988）を取り上げる。

#### 岩手県西和賀町本内Ⅱ遺跡

和賀川右岸に位置する縄文時代中期から晩期の集落遺跡である。1993～1994年にわたる岩手県文化振興事業団による発掘（星・阿倍編1998）の結果、晩期前葉から後葉の住居や土坑が検出された。本稿では大洞A式期の土器がまとまって出土したDVu15住居跡を取り上げる。

#### 岩手県盛岡市本宮熊堂A遺跡

雫石川と北上川の合流点付近に形成された河岸段丘上に立地する。縄文時代晩期中葉～後葉の集落遺跡である。盛岡市教育委員会により4回、岩手県文化振興事業団により6回の発掘が行われている（須原ほか編2007；溜編1988；本多ほか編2004）。遺構は堅穴住居や土坑、焼土が多く検出された。本稿では、第26次調査のRA004住居跡、RE001堅穴状遺構を取り上げる。

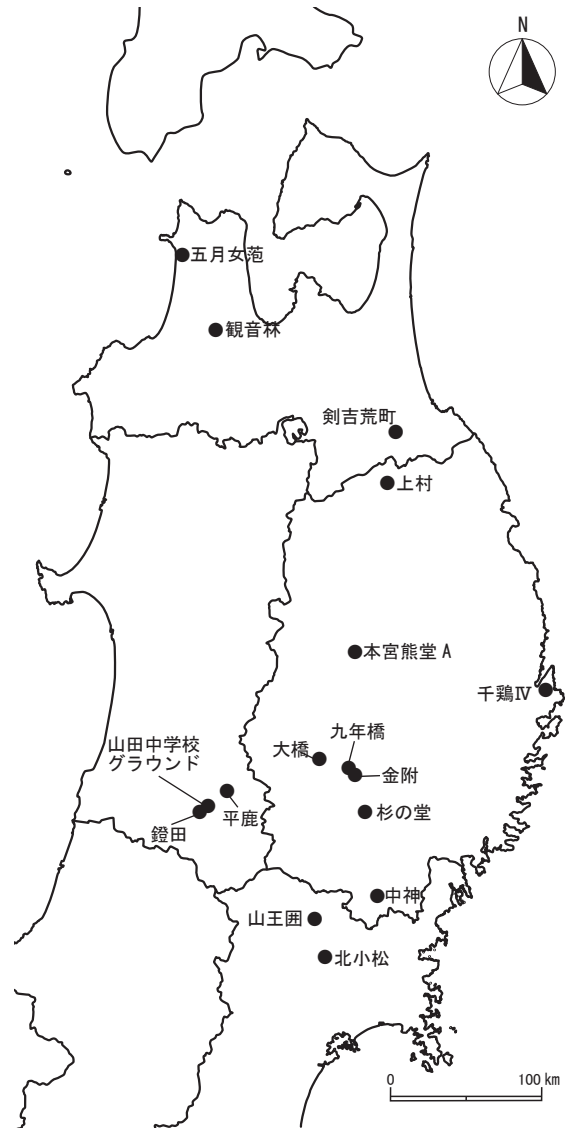


図2 関連遺跡の位置

#### 秋田県横手市平鹿遺跡

横手盆地内の扇状地に位置する縄文時代晩期～弥生時代の遺跡である。秋田県教育委員会の調査（小玉ほか編1983）によって土坑・配石遺構・石囲炉・焼土が検出され、晩期中葉～後葉の遺物が多数出土した。なお、石囲炉や焼土については掘り込みの浅い住居であった可能性が指摘されている（島田編2014：52-55）。本稿では多くの遺構の中でも良好な土器のまとまりが確認されたSX006、SX009、SK116を取り上げる。

### 3-3. 段階設定の方法

本稿では、九年橋遺跡で出土した一括資料を用いて、大洞A式に3つの段階を設定する。この際、施文技法に着目することで、各段階にある程度のメルクマールを見出す。これによって、文様や口部裝飾帯、文様帯の幅よりも時期差を明瞭に示すことができる。さらに、北上川流域や横手盆地にある他の4遺跡の一

表1 一括資料一覧

段階名/地域名		九年橋遺跡	北上川流域	横手盆地
大洞C <sub>2</sub> 式		九年橋1・4・9号焼土	-	-
大洞A式	九年橋18号土坑段階	九年橋18号土坑	本宮熊堂A RA004 本内II DVu15	平鹿SK116 平鹿SX006
	九年橋17号焼土段階	九年橋17号焼土 九年橋1号住居	-	平鹿SX009
	九年橋10号土坑段階	九年橋10号土坑 九年橋18号焼土	本宮熊堂A RE001	-

一括資料を用いて、設定した段階区分が九年橋遺跡に特殊なものではなく、ある程度の地域的な広がりを持つことを示す(表1)。

#### 4. 各段階の設定

##### 4-1. 施文技法の変遷

###### 沈線の施文技法の変遷

九年橋遺跡出土の精製土器は、体部文様の沈線の形態と沈線間の距離によって3つに分類することができる(図3)。なお、同一遺構で出土した土器群の沈線は共通していることから、沈線の差は器種などの差ではなく、時期差を示すと考えられる<sup>2)</sup>。

- ①他と比べて沈線が深く細い。縄文を磨り消す部分を区画する沈線であるため、別の沈線とは距離を離して引かれる。沈線の断面はV字である。高橋(1993b)の定義する九年橋1b~2b期の土器に見られる。
- ②沈線が浅く太い。沈線同士の幅は③と比べて広い。沈線の断面は隅丸方形である。九年橋遺跡18号土坑・九年橋遺跡17号焼土と、それと同様の特徴を持つ土器に見られる。大洞C<sub>2</sub>式と比べてA式に沈線が太くなる点については品川(2003:107)にも指摘がある。
- ③①と同様に再度深く細い沈線に変化する。しかし、沈線間の幅が極端に狭い。沈線の断面形は円形を呈する。九年橋遺跡10号土坑の土器と、それと同様の特徴を持つ土器に特徴的である。

###### ネガ文様処理技法の変遷

九年橋遺跡出土の精製土器は、体部文様を施文する際のネガ文様部分の処理技法でも分類できる(図4)。

- ⑦磨消縄文が残存する土器に見られる技法で、ネガ文様部分を単にナデ消して処理するものである。このため、縄文残存部と磨り消し部分とで高さがほとんど変化しない。高橋の定義する九年橋1b~2b期の土器に見られる。
- ⑧ネガ文様部分の粘土を三角形に彫去する。したがって、ポジ部とネガ部で数ミリ高さが変わり、立体的な文様が作出される。この技法によって、ポジ部に工字文などのモチーフを表現する。磨消縄文は関与

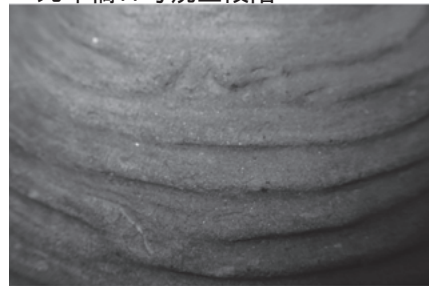
しないことが多く、三角形の彫去は小さく浅いのが特徴である。九年橋18号土坑の土器に見られる。

- ⑨ネガ文様部分の粘土を三角形に彫去するものであるが、①と異なり、三角形が面的に彫去されているのが特徴である。この技法は、大洞A<sub>2</sub>式土器において沈線と組み合わせて用いられることがすでに指摘されている(鈴木1987:124-125)。九年橋遺跡17号焼土、10号土坑の土器に顕著に見られる。
- ⑩細い沈線のみで文様が表現されており、とくに区画によって図形を表現することがない。そのため、ネガ文様部分の処理を必要とせず、ナデや彫去を行うことがない。九年橋遺跡10号土坑の土器全般に見

①大洞C<sub>2</sub>式



②九年橋18号土坑段階  
九年橋17号焼土段階



③九年橋10号土坑段階

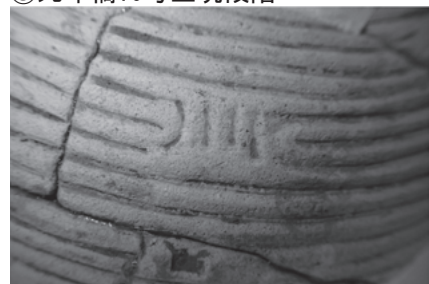


図3 沈線技法の変遷

られる。

**小結**

(1) および (2) で確認してきた施文技法を整理すると、九年橋 1b～2b 期が①と⑦、九年橋遺跡 18 号土坑出土土器が②と④、九年橋遺跡 17 号焼土出土土器が②と⑤、九年橋遺跡 10 号土坑出土土器が③と⑥⑧という組み合わせを持つ。2つの施文技法を組み合わせると、それぞれの土器群が異なる施文技法を持つことが分かる。このことを念頭に置きつつ、次節から北上川流域の大洞 A 式土器について段階設定を行う。

**4-2. 各段階の設定の型式学的な特徴**

**大洞 C<sub>2</sub> 式**

大洞 C<sub>2</sub> 式土器は、「C 字文」「独立並置型ネガ文様」「合体型 1 類」「合体型 2 類」、2b 期は「合体型 3 類」などが指標となる (高橋 1993b)。

九年橋遺跡の遺構一括資料を見ると、9 号焼土出土土器が高橋の言う「九年橋 1b 期」、1 号焼土出土土器が「九年橋 1b～2b 期」にそれぞれ比定できる。これらの土器の施文技法は①と⑦に該当する。近隣にある大洞遺跡で検出された盛土遺構にも良好な一括資料があり、当該期編年の層位的な検討が可能である (八木ほか編 2006)。なお、九年橋遺跡の大洞 C<sub>2</sub> 式の土器には台付浅鉢<sup>3)</sup> がほとんど見られない点が注目される。

**九年橋 18 号土坑段階 (図 5)**

九年橋 18 号土坑出土土器 (藤村 1988) を基準とする。施文技法②と④が特徴である。

同時期の資料に本内 II 遺跡 DVu15 住居址 (星・阿倍 1998)、平鹿遺跡 SK116、SX006 土坑 (小玉ほか 1983)、本宮熊堂 A 遺跡 RA004 (須原ほか編 2007) などがある。

なお、遺構一括資料には完形の壺がなかったため、18 号土坑近隣の F8 区遺構外から出土した個体を掲げた (図 5-4)。

**器形と装飾** 壺は「九年橋 1b～2b 期」から引き続き、精製と粗製の別がある。器形は前段階よりも胴部最大径の位置でつよく屈曲するようになる。精製壺は頸部が大洞 C<sub>2</sub> 式より細くなる (図 5-1・9)。胴部最大径の位置は体部中位にあり、この付近まで文様帯が広がる。図 5-4 を参照すると、口縁部には四単位で突起が施される。外面は突起に沿って三角形の彫去が行われる。口縁部は外反し、内面には沈線が一条めぐる。台付浅鉢は直線的に開く器形をしている。文様帯は体部中位まで広がる (図 5-2・5)。口縁部には突起が見られ、内面には沈線が一条めぐる。

**文様** 精製土器の体部に平行沈線上に小さい三角形

⑦大洞 C<sub>2</sub> 式



④九年橋 18 号土坑段階



⑤九年橋 17 号焼土段階



⑥九年橋 10 号土坑段階

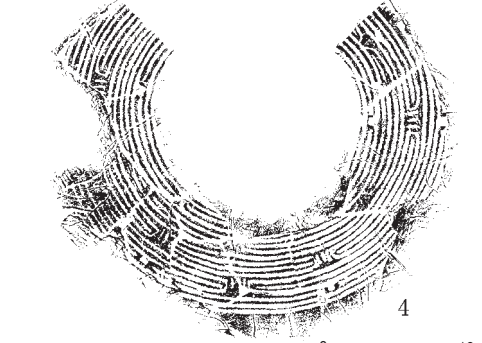
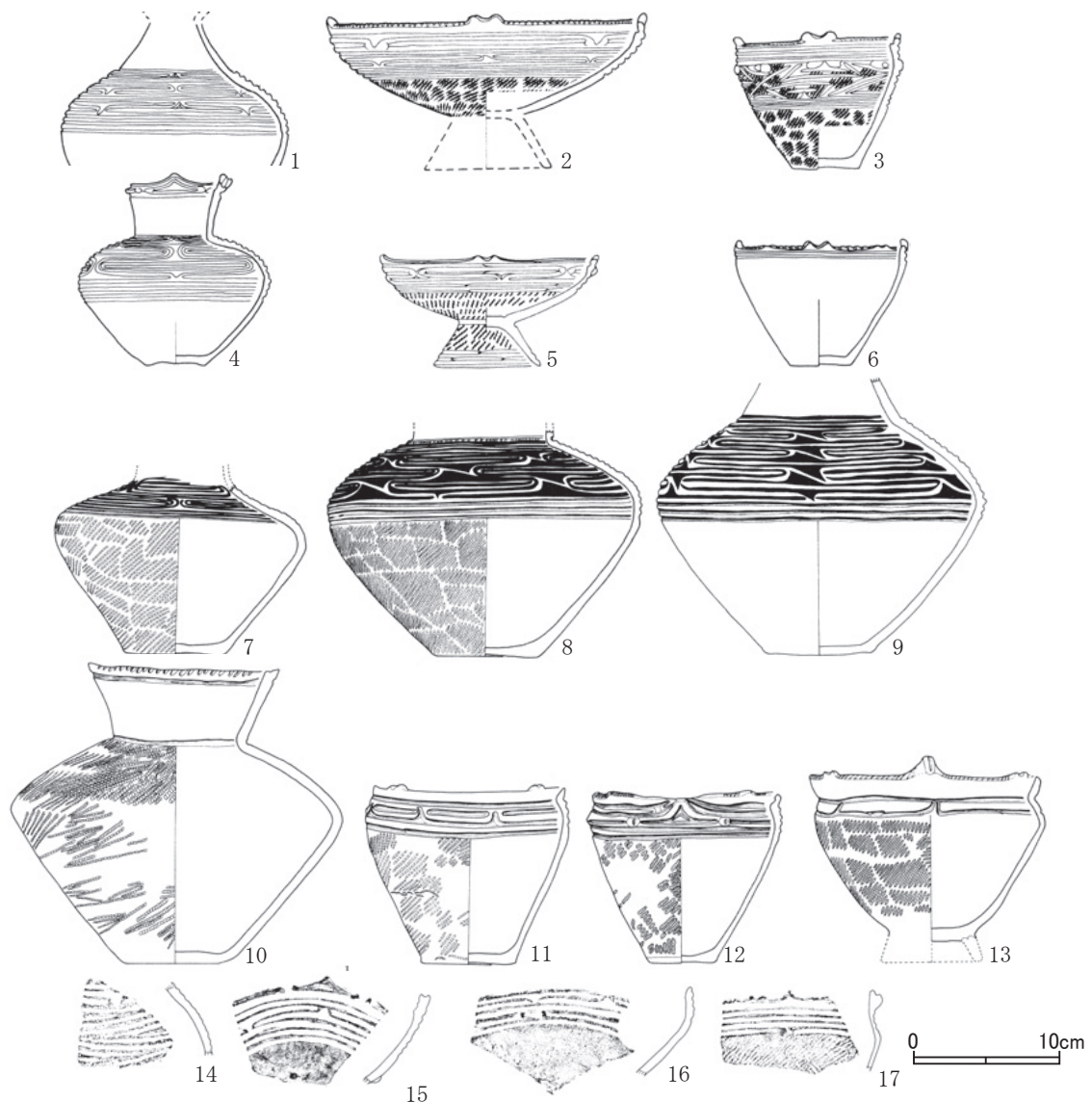


図 4 ネガ文様処理技法の変遷

の彫去 (ネガ文様処理技法④) が行われる、典型的な工字文が施文される。三角形の彫去は器面に対して垂直のもの (図 5-1・2) とやや大きく斜めになっているもの (図 5-8・9) の 2 種がある。前者は壺・浅鉢・台付浅鉢に見られるものの、後者は壺のみ見られる。鉢には高橋 (1993b) が言う特殊な独立並置型ネガ文様が出現する (図 5-3)。



1-3: 九年橋 18号土坑 4: 九年橋 (遺構外) 5-6: 九年橋 9号土坑  
7-13: 平鹿 SX006 16-21: 平鹿 SK116

図5 九年橋 18号土坑段階の土器

### 九年橋 17号焼土段階 (図6)

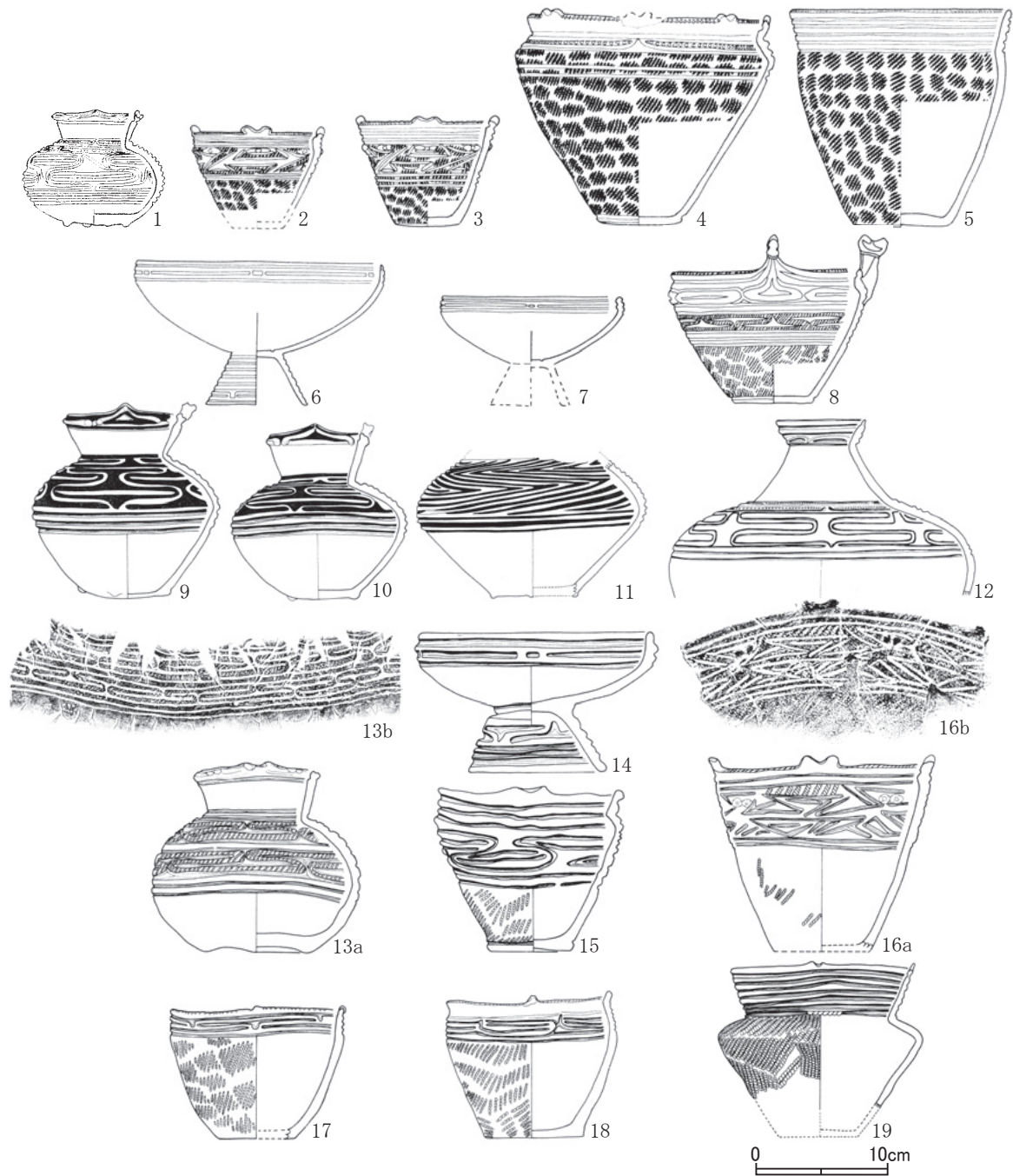
九年橋 17号焼土 (藤村 1988) 出土土器を基準とする。施文技法②と㊸が特徴である。

同時期の資料に九年橋遺跡 1号住居 (藤村 1986)、平鹿遺跡 SX009土坑 (小玉ほか1983) などがある。

**器形と装飾** 壺の器形は、大型のものの胴部最大径の位置が前段階よりも上位に位置する。小型のものはほとんど変化しない。装飾に注目すると、大型土器は簡素化し、突起がない (図6-12) もの一部確認されているが例外的で、口縁部に突起があり、隆帯による装飾を持つものが多い (図6-1)。このように大洞 A 式において隆帯化が顕著になっていくという変化は、品川 (2003: 110) にも指摘がある。台付浅鉢 (図6-6・7) は前段階と比して体部が曲線的になり、

口縁部が直立するようになる。台部は開きが小さくなり、やや高くなる。口縁部からは突起がなくなるが、口縁外面に段を作出するようになる。内面には沈線が一条めぐる。

**文様** 壺は前段階の工字文に見られたネガ文様処理技法④の三角形の部分の大型化する。これによって、ネガ文様処理技法㊸のような面的な彫去が生まれる。この結果、隆線による工字文が施文されるようになる (図6-9・10)。台付浅鉢には平行沈線間に方形の区画が入った匹字文の一種が施文されるようになる (図6-6・7)。この区画を設ける際には、左右に余った粘土が平らになるよう処理している場合が多い。鉢には特殊な独立並置型ネガ文様が施文される (図6-2・16) が、前段階と違い、縄文が一部磨り消された



1-5: 九年橋 17号焼土 6-8: 九年橋 1号住居 9-19: 平鹿 SX009

図6 九年橋 17号焼土段階の土器

ものがある(図6-2)。高橋(1993b)で言及されている「縄文施文の工字文」はこの段階にも見られる(図6-8・13)。

**九年橋 10号土坑段階(図7)**

九年橋 10号土坑(藤村 1987)出土土器を基準とする。施文技法③と㊦㊧が特徴である。同時期の資料に九年橋遺跡 18号焼土(藤村 1988)、本宮熊堂 A 遺跡 RE001 竪穴状遺構(須原ほか 2007)などがある。

なお、この時期の一括資料に壺が見られない。そのため、施文技法③と㊦を持ち、九年橋 18号土坑焼土

近隣の H8 区、I8 区遺構外から出土した壺を提示している(図7-13・14)。

**器形と装飾** 壺は胴部最大径の位置が体部上位に変化し、屈曲がかなり強くなる。これと連動して、文様帯の幅が狭小になる。口縁には突起がほとんど見られなくなる(図7-1・2)。口縁部外面の隆帯は眼鏡状浮文のような装飾に変化する。台付浅鉢の鉢部の器形は、体部が内湾して口縁部が直立またはやや開いており、前段階とほとんど変化しない。一方で、台部は前段階よりも開きが小さくなり、鉢部との接合部が小さ

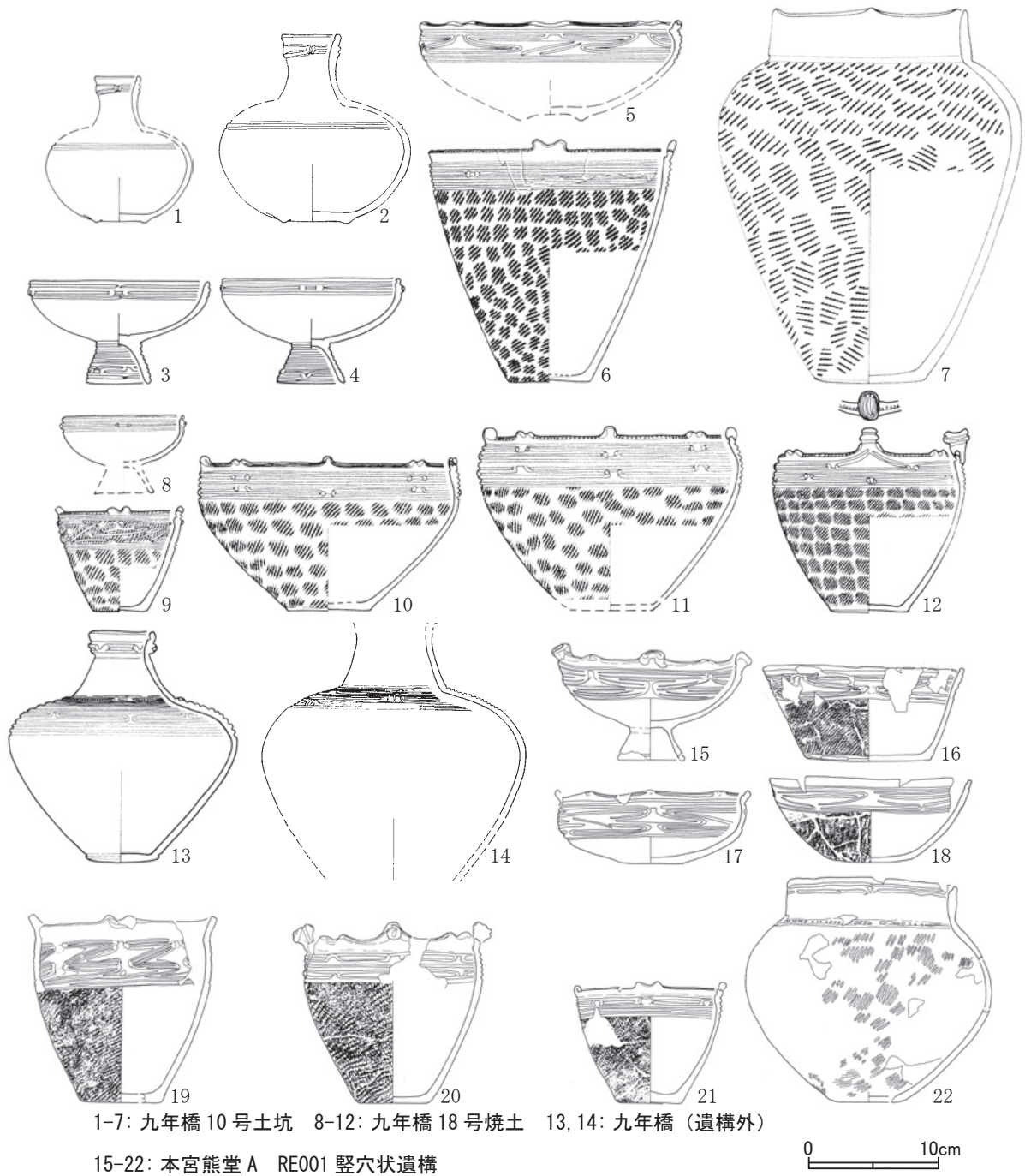


図7 九年橋10号土坑段階の土器

くなる (図7-3・4)。

**文様** 壺には沈線化した流水状の工字文 (図7-13・14) が見られる。この文様は補助要素として3~4本の縦線を持ち、横位の沈線同士の間を充填している。沈線間の距離が狭く、稠密な印象を与える。

浅鉢には、主文様として三角形の彫去を持つ変形匹字文、主要素の間に補助要素として斜線が入る、いわゆる特殊工字文が施文される (図7-5)。これらは特殊工字文の中でも、いわゆる「北部型特殊工字文」にあたる (佐藤2005)。

台付浅鉢には前段階と同様、匹字文の一種が施文される。しかし、方形の区画を描くときに生じた粘土を処理しなくなっていく。このため、平行沈線上に粘土粒を2つ貼り付けたようになる (図7-3・4)。粘土粒は鉢にも見られる (図7-6)。このような粘土粒は大洞A'式に顕著に見られるが、その前段階から粘土粒が存在していたと言える。また、多くの器種に沈線内に凸字の彫去を設ける文様 (図7-10・11) が施文される<sup>4)</sup>。



### 4-3. 設定した段階の検討

#### 遺構分布の検討

九年橋遺跡では出土遺物が調査区の南側から北側に向かって新しくなる傾向が指摘されている（小林 1991a・b；高橋 1993a・b）。これらは遺構外資料を多く用いた研究であるが、本稿の編年観と大枠は一致する。そこで、本稿で取り上げた遺構がこの傾向を満たすか確認するため、遺構分布図を作成した（図8）。この図から、本稿で取り上げた遺構について時期が下るにつれて北へ分布を移すことが分かる。しかし、17号焼土が18号土坑より南側にある点だけは分布の逆転が起きている。これは九年橋18号土坑段階と17号焼土段階を分布の上では分離できない可能性を示唆する。また、土坑と焼土とでは異なった分布の法則を持っている可能性も指摘できる。後者については、土坑と焼土は別々の場所に設ける方が自然であるため、十分考慮に値するが、他の土坑・焼土から良好な一括資料が出土しておらず、検討が難しい。このような問題があるものの、本稿の編年がこれまで九年橋遺跡について指摘されていた傾向とおおむね整合的であることに変わりはない。

さらに、遺構の切り合いからも4.2節の編年を一部裏づけることができる。藤村によれば、10号土坑を掘る際の土盛りが9号土坑を覆っているため、9号土坑より10号土坑の方が後に作られたことが分かる（藤村 1987：11 - 12）。9号土坑出土土器は2点ではあるが、そのうち図5-4の台付浅鉢は器形や装飾、体部の文様から、九年橋18号土坑段階に比定できる。この段階は九年橋10号土坑段階より時期的に古い。したがって、遺構の切りあいと土器編年が整合する。

#### 他の編年との比較

本稿の編年観は伊東・須藤（1985）、須藤（1997）、品川（2003）のいずれとも大枠は一致する。伊東・須藤（1985）の山王圀編年、および須藤（1997）の中神編年とは、台付浅鉢の変遷について、山王圀遺跡Vc-7・m・n層や、中神遺跡縄文時代5b期の粘土粒が発達した個体を九年橋10号土坑段階、その他を九年橋18号土坑段階に置く点以外はおおむね一致する。

品川（2003）とは壺の口縁部装飾や文様帯幅の変遷について同様の傾向が見られた。しかし、本稿は「大洞C<sub>2</sub>式第1期」の1~4を大洞A式の範疇で理解し、「大洞A式第1期」の11を九年橋17号焼土段階とし、同時期とされた8・9を九年橋18号土坑段階と考える点で異なる。さらに、「大洞A式第3期」の23を九年橋18号土坑段階とし、24・25を「大洞A式第4期」の30~34と同じ九年橋10号土坑段階に置くといった細部での違いがある。また、品川のいう合体型工字文系

列の土器は遺構一括資料を用いてはうまく位置付けられなかった。

## 5. 矢羽状沈線文の検討

### 5-1. 矢羽状沈線文の定義と研究略史

矢羽状沈線文とは「く」の字状の沈線を複数組み合わせさせて描かれる文様である。壺や浅鉢に施文されることが多く、鉢や台付鉢にもまれに見られる。台付浅鉢や注口土器にはほとんど施文されない。北上川流域では九年橋遺跡で17点が報告されているほか、多くの出土例があり、壺に顕著に見られる（表2）。

最初に矢羽状沈線文の帰属時期について触れたのは芹沢長介である。芹沢は亀ヶ岡遺跡出土の矢羽状沈線文が施された深鉢を大洞A式土器の一例として掲げた（芹沢 1960：218）。以後、報告書などでも大洞A式に見られる文様とされることが多い。また、矢羽状沈線文の分布域は東日本に留まらず、岡山県津島岡大遺跡などでも出土しており（山本ほか 1992）、西日本との関連が注目される（石川 1997）。しかし、東北地方では研究史上看過され、この文様の帰属時期や分類・分布が議論されることはほとんどなかった。

矢羽状沈線文を細分した数少ない研究には、鈴木（2003）がある。鈴木は矢羽状沈線文を「綾杉文帯系土器群」として大洞A式の土器とした。その上で、須藤（1997）の中神遺跡編年に依拠して、以下のような矢羽状沈線文の4段階の変遷を論じた。

「九年橋Ⅰ期：工字文に付随した形態」→「九年橋Ⅱ期：工字文帯の縮小と綾杉文帯の拡張」→「九年橋Ⅲ期：工字文帯の縮小と綾杉文帯の拡張」→「九年橋Ⅳ期：工字文帯の縮小と綾杉文帯の拡張」

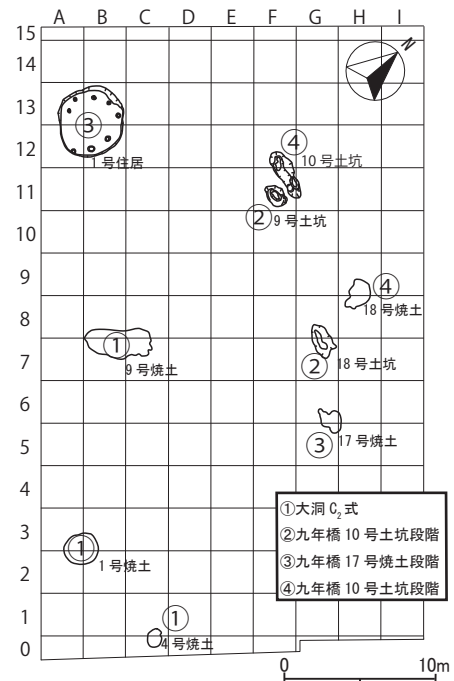


図8 九年橋遺跡の遺構分布図

Ⅲ期：工字文帯の消滅と綾杉文の弛緩による拡張」→「九年橋Ⅳ期：綾杉文の高密度充填手法の定着」（図9）。

この内、文様が稠密化するという点は筆者の考え（図10）と共通する。一方で、矢羽状沈線文が工字文に付随するのは大洞A式期を通して見られる現象である（後述）。また、Ⅱ期の「綾杉文帯の拡張」は、時期的なものではなく図9-3が壺に矢羽状沈線文の重層が見られる特殊な例であると解釈すべきである<sup>5)</sup>。また、矢羽状沈線文のバリエーションを踏まえると、この文様が単線的なものではなく、図10のように複線的に変化する文様である可能性を念頭に置くことが望ましい。したがって、4章で設定した編年観に沿って、矢羽状沈線文の特徴を類型ごとに確認し直す作業が必要である。

また、筆者は秋田県湯沢市鑑田遺跡、同市山田中学校グラウンド遺跡採集遺物に施文された矢羽状沈線文を取り上げた。具体的には、矢羽状沈線文をZ字状の文様（A類）と「く」の字状の文様（B類）に細分し、後者については沈線の幅によってさらに2類型に細別した。その上で、帰属時期と地域差について考察した（根岸ほか2022）<sup>6)</sup>。

### 5-2. 矢羽状沈線文の分類

矢羽状沈線文は形態から以下のように3つに大別できる（図10）。3つの類型はあくまでも晩期の限られた地域における分類であるため、今後、形態や施文技法を基準としてさらに細分する必要があると考えている。

表2 北上川流域の矢羽状沈線文集成

遺跡名	報告数（点）	文献
手代森	2	佐々木・佐々木（1986）
上八木田	1	平井（1992）
不動Ⅰ	1	千葉（2009）
大橋	2	八木ほか（2006）
九年橋	17	藤村（1977・1979・1980・1986・1987・1988・1991） 佐々木ほか（1997）
上川岸Ⅱ	2	光井・玉川（1991）
牡丹畑	3	君島（2003）
鶯木	2	草間（1974）
東裏	2	相原・狩野（1980）
杉の堂	4	村上ほか（2020）
川岸場Ⅱ	4	小山内（2000）
中神	2	須藤（1997）
高倉	1	佐藤ほか（1998）

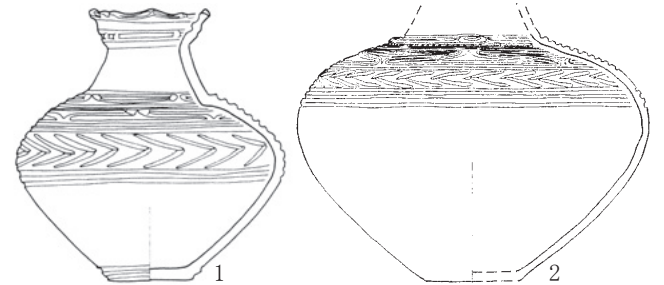
【A類】4画以上で「Z」字状の文様を施文するもの

図10-1・2が該当する。文様帯の上端から下端までジグザグに沈線が施される。沈線が3回以上方向を変える点で、B類・C類と異なる。この沈線は文様帯を区切る沈線と接着する場合（図10-1）としない場合（図10-2）の両方ある。沈線同士は横方向に適当に間隔を空けて施されているものと、沈線同士の間隔がほとんどないものもある。左右については、最上段の沈線は右上から左下に向かう例、左上から右下に向かう例の両方ある。

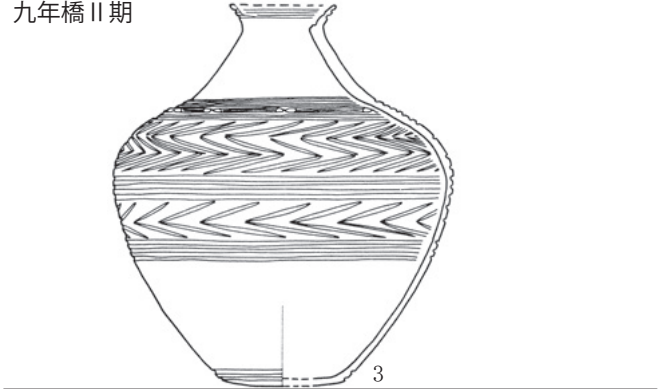
【B類】3画で「Z」字状の文様を施文するもの

図10-3・4が該当する。文様帯の中間部分に沈線でZ字状の文様が描かれる。沈線が2回のみ方向を変える点で、A類・C類と異なる。Z字がある程度間隔

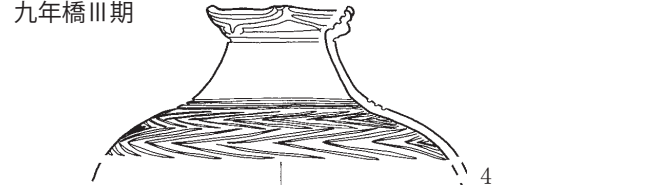
九年橋Ⅰ期



九年橋Ⅱ期



九年橋Ⅲ期



九年橋Ⅳ期

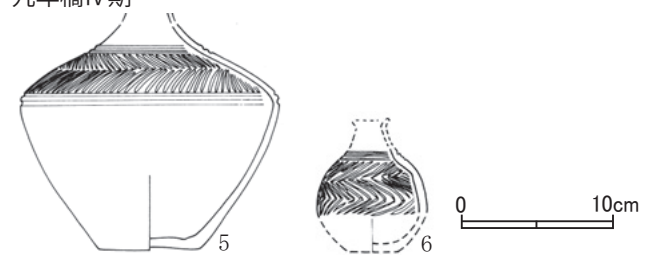


図9 鈴木（2003）の矢羽状沈線文変遷図

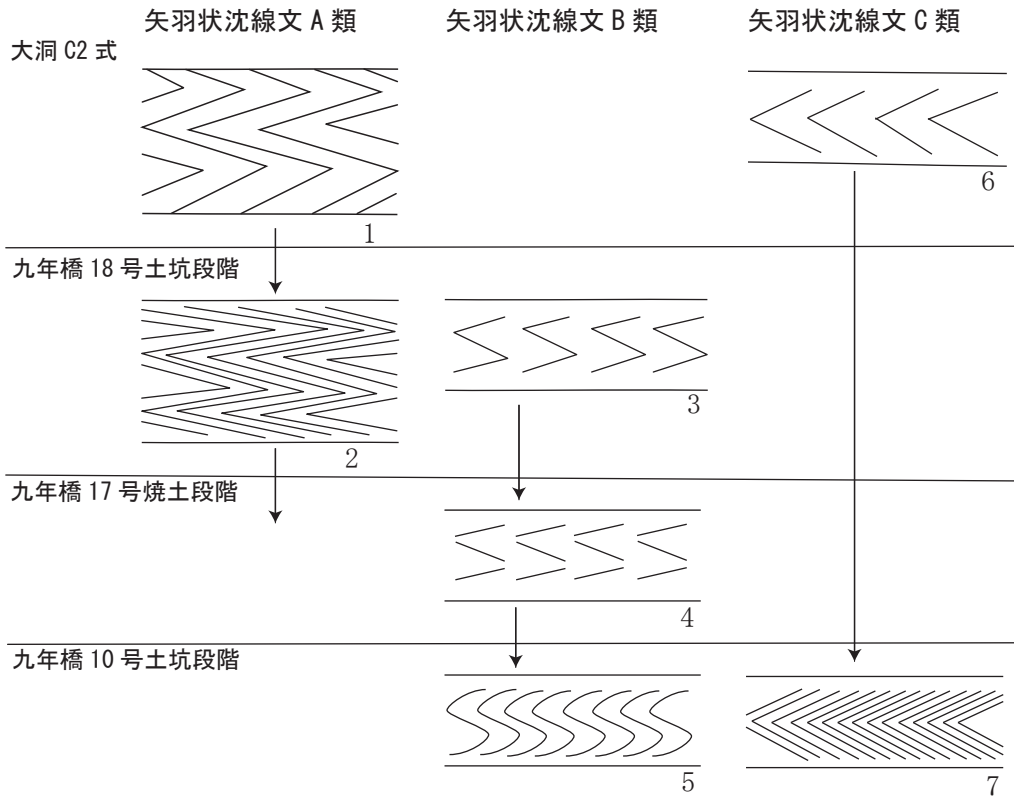


図10 矢羽状沈線文の分類と変遷

を空けて整然と施文されている。この沈線は文様帯を区切る沈線に接着しない。Z字のものもあれば、逆Z字のものもある。剣吉荒町遺跡などで縄文の上からB類が施文されている例が報告されているが、東北地方ではきわめてまれである。

【C類】2画で「く」字状の文様を施文するもの

図10-6・7が該当する。文様帯中央に「く」の字が連続して刻まれる文様が該当する。もっとも典型的な矢羽状沈線文のモチーフである。この沈線は文様帯を区切る沈線に接着しない。沈線同士は適度に間隔を取って施されているもの(6)と、沈線同士の間隔がほとんどないもの(7)の両方がある。「く」の字は右が開く例の方が圧倒的に多いが、左が開く例も少数ある。

浅鉢ではB類が二段に渡って施される場合がある。この場合、上の文様帯が右に開き、下の文様帯が左に開く例がほとんどである。浅鉢に施文される例は北上川流域には少ないが、青森県五所川原市五月女滝遺跡(榊原ほか編2017)など、津軽平野で多く報告されている。

5-3. 矢羽状沈線文の変遷 (図12)

矢羽状沈線文A類

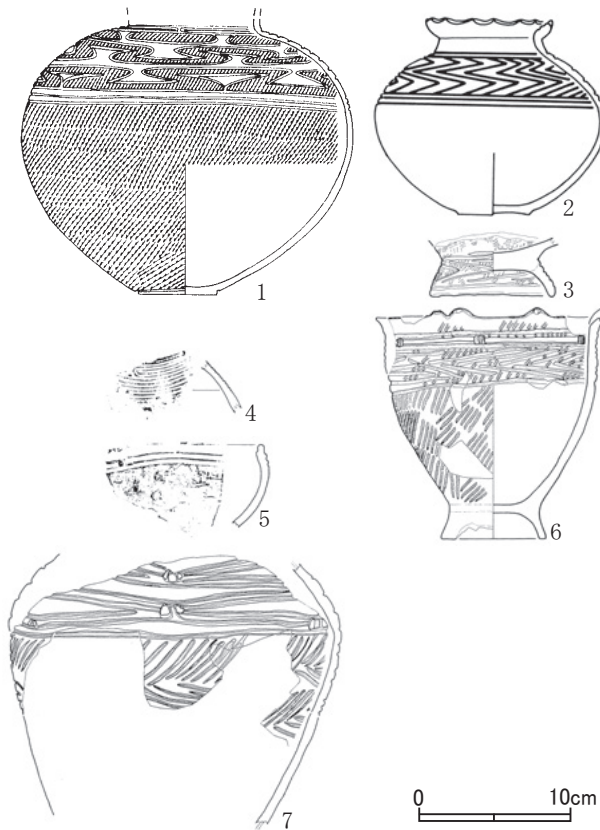
矢羽状沈線文A類が最初に登場するのは大洞C<sub>2</sub>式期である(図11-2, 図12-1)。この土器は九年橋

遺跡4号焼土から出土しており、図11-1の壺と共伴している。図11-1の体部文様が合体型2類であることから、図12-1も同時期の土器と比定できる。また、図11-1は施文技法①と⑦が使用されており、このことから大洞C<sub>2</sub>式と判断できる。北上川流域における大洞C<sub>2</sub>式期のA類は管見の限りこの1例に留まる。沈線同士の間隔が開いており、文様帯を区切る平行沈線に矢羽状沈線文が接着する。文様は壺の胴部最大径よりやや下まで広がる。

九年橋遺跡18号土坑段階になると、沈線同士の間隔が狭まる(図12-2)。この個体は小破片であり、文様帯の幅は分からない。A類は九年橋17号焼土段階までは継続してみられ(図12-5)、文様帯は胴部最大径よりやや下位まで広がる。北上川流域では、九年橋10号土坑段階のA類は見つかっていない。

矢羽状沈線文B類

矢羽状沈線文B類は他の2類型と異なり、九年橋18号土坑段階に初めて出現する。この段階では沈線同士がやや丸みを帯びた状態につながっており、Z字というよりS字に近い(図12-3)。しかし、九年橋17号焼土段階になると、沈線同士が離れてしまうものが現れる(図12-6)。ただし、この土器は秋田県湯沢市山田中学校グラウンド遺跡で採集された個体であり、時期差ではなく地域差である可能性が残る。北上川流域において確実に九年橋17号焼土段階に比定できる



1-2: 九年橋4号焼土 3: 大橋南盛土 CC' ベルト1層  
4-6: 上村12号竪穴 7: 千鷲IV遺跡

図11 矢羽状沈線文の関連資料

B類土器は見つかっていないため、今後の資料の増加を待ってB類の変遷を考える必要がある。九年橋10号土坑段階になると、B類は再びS字に近い文様が見られ、さらに沈線同士の幅が狭くなっており、文様の稠密化が進む(図12-8)。

#### 矢羽状沈線文C類

矢羽状沈線文C類は大洞C<sub>2</sub>式期に出現する可能性がある(図11-3)。この土器は大橋遺跡南盛土のCC'ベルト第1層から出土しており、相伴する土器は高橋のいう「独立並置型ネガ文様」や「合体型1類」を持つ土器である。しかし、盛土の最上層から出土していることなどを加味すると、後の時期の土器が混入した可能性があるため、慎重に時期判断する必要がある。この個体は矢羽状沈線文をもつ文様帯の地紋に縄文を持つ。同様の例は九年橋遺跡の鉢に見られる(藤村編1986: PL387-3)。他に矢羽状沈線文C類を大洞C<sub>2</sub>式に比定している報告には、作野遺跡(植松・後藤編2011, 2012)などがある。C類は九年橋18号土坑段階・17号焼土では確実に出現しており(図12-4・7)、施文技法②によって施文される。矢羽同士はやや間隔が離れており、2本の沈線はおおむね接着する。

図12-9は肩が張る器形と文様帯の狭さから九年橋10号土坑段階に比定できる。この土器を見ると、C類はB類と同じく稠密化が進んでおり、異なる類型同士で似た変遷を辿っていることが分かる。やや地理的に隔たりがあるが、当該段階と同様の文様図形を持つ土器と相伴するC類は、馬淵川・新井田川流域にも見られる(図11-6)。この土器は上村遺跡12号竪穴で出土しており、施文技法③と④を持つ土器(図11-4・5)と相伴していることから九年橋10号土坑段階に比定できる。図11-6はそれまでの時期と比べて矢羽同士の距離が小さくなり、2本の沈線が離れており、雑然とした印象を与えるものに変化している。九年橋10号土坑段階のC類が整然とした文様であるのと対照的である。さらに、文様帯に縄文を持つ点も前段階と異なる。

#### 大洞A'式期以降の矢羽状沈線文<sup>7)</sup>

九年橋遺跡周辺では大洞A'式期になると矢羽状沈線文が見られなくなる。しかし、宮古市千鷲IV遺跡から新しい時期の矢羽状沈線文が出土している(図11-9)。この文様は、矢羽状沈線文C類のうち、稠密化が進んだ例である。この土器には複段化した変形工字文が施文されており、青木畑式併行期まで下ると判断できる。時期が下ると稠密化が進むというのは鈴木(2003)の指摘と一致する。しかし、稠密化が始まる時期については再考の必要があると考えている。また、東北地方では大洞A'期にも矢羽状沈線文C類が存在することが示唆される。北上川流域以外にも地域を広げた大洞A'期の検討が必要である。

#### 5-4. 矢羽状沈線文の地域差

本稿は北上川流域を主眼としているものの、矢羽状沈線文の東北地方内部での地域差にも補足的に触れる。矢羽状沈線文には器種と施文技法に地域差が確認できる。北上川流域や横手盆地では壺に多く施文される。一方で、津軽平野では浅鉢に施文される例が多い。また、壺には矢羽状沈線文A類、浅鉢には矢羽状沈線文C類(とくに重畳するもの)(図10-6)が施文される例が多い。したがって、器種・文様・地域の3要素に相関関係がある可能性を指摘できる。

沈線技法については、矢羽状沈線文の沈線を観察すると、津軽平野の矢羽状沈線文は沈線の両端が細く、中央がやや膨らんでいる。これに対して北上川流域の矢羽状沈線文はおおむね同一の太さの沈線を使用する(根岸ほか2022)。これは東北地方一円で同一の図形を使用している、施文具や施文具の使用法(施文角度や力の入れ方など)に地域差が存在することを示唆している。

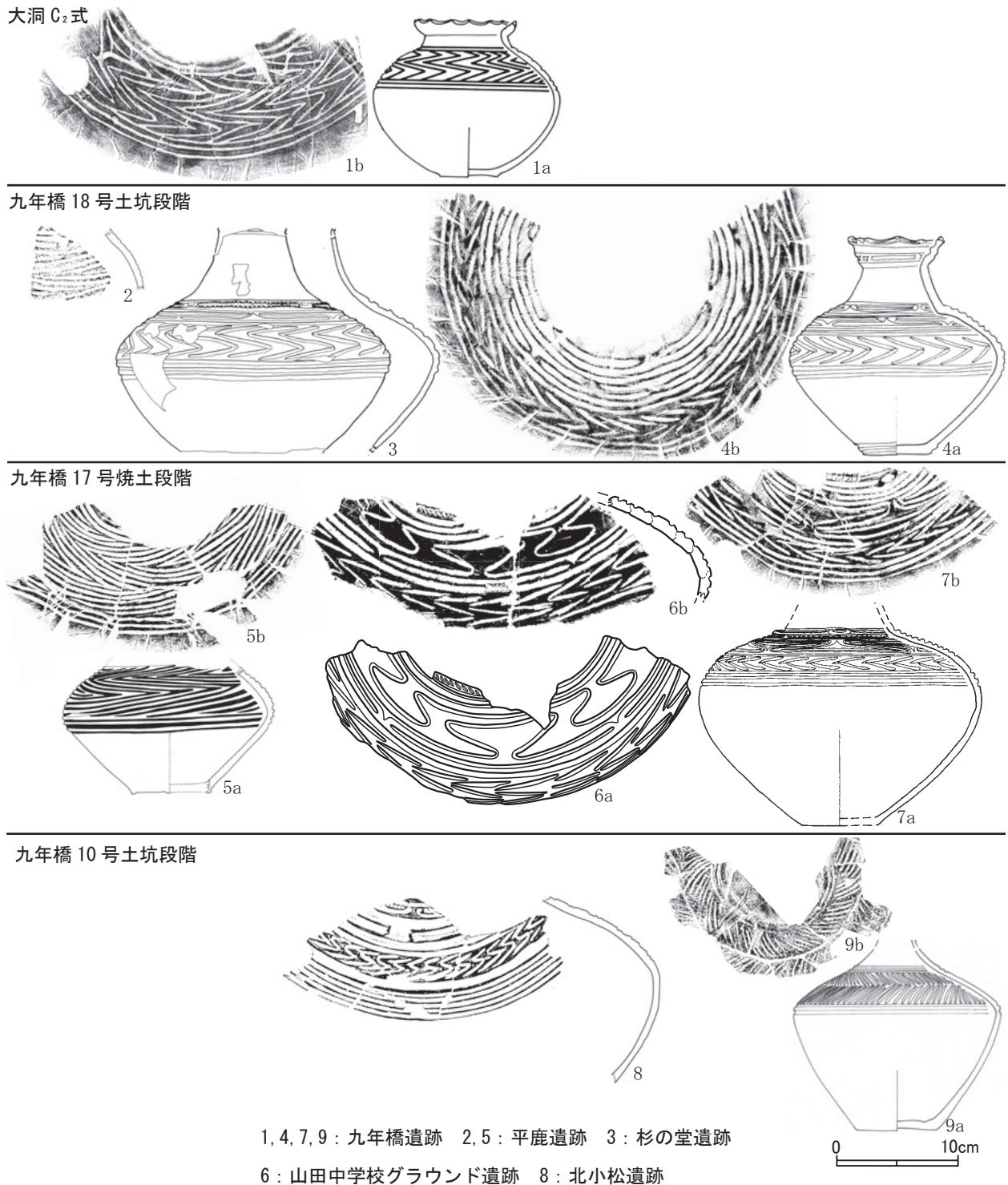


図12 矢羽状沈線文の帰属時期

## 6. 結論

本稿では今まで編年に活用されてこなかった九年橋遺跡の遺構一括資料に注目し、大洞 A<sub>1</sub>～A<sub>2</sub>式を九年橋遺跡 18号土坑段階、17号焼土段階、10号土坑段階の3段階に分類した大洞 A式の土器編年案を新たに提示した。この際、沈線の施文技法とネガ文様部分処理技法の2つの施文技法に注目し、段階ごとに施文技

法が変化していくことを指摘した。さらに、この細分を補強するため、九年橋遺跡の遺構分布を確認し、北上川流域と横手盆地に位置する他遺跡の一括資料を確認した。

この3細分をもとに、後半では北上川流域における矢羽状沈線文の変遷を検討した。最初に矢羽状沈線文をA～C類の3類型に細分した。その上で、大洞 C<sub>2</sub>式期～九年橋 10号土坑段階に至るまで、それぞれの類

型の変遷を確認した。さらに、矢羽状沈線文が大洞A'期以降も東北地方で存続することを確認し、3つの類型が器種差や地域差と結びついていることを指摘した。また、地域により施文技法に差があることも確認した。

しかし、矢羽状沈線文は千鶏IV遺跡例をはじめ、弥生時代前期にも確実に存在する。地域的には、矢羽状沈線文は南東北や北陸、関東、中部高地でも多く確認されている。つまり、この文様は時期的にも地域的にも本稿で扱った範囲を大きく超える広がりを持つ文様である。実際、矢羽状沈線文の起源については東日本全体を俯瞰して考える必要性が指摘されている（関根2021）。そのため、今後は時空間的により包括的に矢羽状沈線文を検討する必要がある。今後の課題とした。

## 謝辞

本稿は2020年度に東京大学文学部に提出した卒業論文を全面的に書き改めたものである。執筆に際しては、指導教員である根岸洋先生をはじめ、考古学研究室の佐藤宏之先生、福田正宏先生、森先一貴先生、新井才二先生、金崎由布子先生のご指導を賜った。資料調査にかかる費用は東京大学エッジキャピタルパートナーズからの援助を受けた。また、下記の方々や機関にもご指導・ご協力をいただいた。末筆ではありますが、記してお礼申し上げます。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、北上市立埋蔵文化財センター、横手市教育委員会  
岩田貴之、金子佐知子、塩原健、設楽博己、島田祐悦、藤原正大  
(五十音順・敬称略)

## 註

- 1) 矢羽状沈線文の表記には揺らぎがある。矢羽状沈線文は杉山(1928)にすでに登場しているが、「この種の文様」などと呼ばれ、命名には至らなかった。芹沢(1960)では「矢がすり状の沈線文」、磯崎(1975)では「矢羽根状の構図」、亀ヶ岡文化研究会(1979)では「矢羽根」と表記されている。その後、工藤(1987)で「矢羽状沈線文」とされるように、現在のような名称が一般化した。「矢羽状沈線文」と「矢羽根状沈線文」はいずれも広く用いられているが、本稿では「矢羽状沈線文」の表記で統一した。
- 2) 施文技法に見られるバリエーションの背景には施文具や施文タイミングが変化したことが考えられる。
- 3) 本稿では、台付鉢の内、図5-2・4のように鉢部の高さが口径より小さいものを台付浅鉢と呼ぶ。
- 4) 高瀬(2000)でいう「凸字文系列」に該当する。なお、本宮熊堂A遺跡RE001には九年橋17号焼土段階に見られた平行沈線上に方形の区画を持つタイプの凹字文が報告され

ている(須原ほか2007:図32-64)。しかし、実見の結果、方形の区画より下の平行沈線まで彫去がなされており、凸字文とするのが適切と判断した。

- 5) 矢羽状沈線文が重層する壺は、他に五所川原市観音林遺跡(新谷・川村編1987)の長頸壺など、限られた例しか見つかっていない。
- 6) 根岸ほか(2022)のA類、B類はそれぞれ本稿のB類、C類に該当する。
- 7) 大洞A'式以降の「矢羽状沈線文」と称されている資料に、青森県八戸市剣吉荒町遺跡の資料がある。工藤竹久が波状工字文の起源とした文様である(工藤1987:45)。剣吉荒町遺跡に多く見られる「矢羽状沈線文」は斜めのハの字が交互に組み合わせようモチーフである。2画で施文しているため、筆者の分類でいうC類に当てはめることができるが、本稿で示したものはかなり異なっている。器種は、壺や浅鉢にはほとんど見られず、鉢に圧倒的に多く施文される。このような器種と文様形態の違いから、北上川流域周辺に多く見られる矢羽状沈線文C類と同一系統にある文様かは慎重に議論する必要がある。

## 引用文献

- 相原康二・狩野敏男 1980 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI』岩手県文化財調査報告書55, 岩手県教育委員会
- 新谷雄蔵・川村真一編 1987 『観音林遺跡 第5次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書10, 五所川原市教育委員会
- 石川日出志 1997 「岡山県内出土刻目突帯文期の東日本系土器」『古代吉備』19:29-39
- 磯崎正彦 1975 「工字文土器論序説」『大阪学院大学人文自然論叢』1:49-62
- 伊東信雄・須藤 隆 1985 『山王冨遺跡調査図録』一迫町教育委員会
- 岩瀨 計・前田 稔・星 雅之編 2002 『上村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書375, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 植松暁彦・後藤枝里子編 2011 『作野遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書194, 山形県埋蔵文化財センター
- 植松暁彦・後藤枝里子編 2012 『作野遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書205, 山形県埋蔵文化財センター
- 大坂 拓 2009 「大洞A<sub>2</sub>式土器の再検討—山形県天童市砂子田遺跡・山形市北柳1遺跡出土土器群の編年の位置」『考古学集刊』5:39-74
- 大坂 拓 2012 「本州島東北部における初期弥生土器の成立過程—大洞A'式土器の再検討と「特殊工字文土器群」の提唱—」高瀬克範編2012『江豚沢遺跡I』江豚沢遺跡調査グループ:144-181
- 小山内透編 2000 『川岸場II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書317
- 小野章太郎・西村 力・吉川昌伸・吉川純子・早瀬亮介編 2021 『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第255集, 宮城県教育委員会
- 亀ヶ岡文化研究会 1979 『新郷村咽畑遺跡の調査』亀ヶ岡文化研究会調査研究報告1

- 君島武史編 2003 『牡丹畑遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告 58, 北上市教育委員会
- 工藤竹久 1987 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72 (4) : 39-68
- 小玉 準・池田洋一・佐藤雅子編 1983 『平鹿遺跡』秋田県文化財調査報告書101, 秋田県教育委員会
- 小林正史 1991a 「縄文時代終末期における東北地方中・南部の地域差」『北越考古学』4 : 23-50
- 小林正史 1991b 「単位文様と器種組成からみた縄文終末期の地域差」『東日本における稲作の受容—第1分冊 研究発表概要・追加資料—』東日本埋蔵文化財研究会, 92-125
- 斎野裕彦 2011 「東北地方」『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』青木書店, 430-484
- 榊原滋高・江戸邦之・藤原弘明編 2017 『五月女菴遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書34, 五所川原市教育委員会
- 佐々木清文・佐々木嘉直編 1986 『手代森遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書108, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木勝・佐藤嘉広・鈴木 徹・佐々木務編 1997 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書99, 岩手県教育委員会
- 佐藤祐輔 2005 「砂子田遺跡が投げかける問題」『山形考古』8 (1) : 1-32
- 佐藤祐輔 2008 「変形工字文覚書—変形する工字文と変形する変形工字文—」『地域と文化の考古学II』六一書房, 75-90
- 佐藤祐輔 2019 「縄文晩期末葉・大洞 A<sub>2</sub> 式土器の研究史を紐解く」『考古学集刊』15 : 39-57
- 佐藤嘉広・佐々木務・佐々木勝・鈴木 徹編 1998 『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告書102, 岩手県教育委員会
- 設楽博己 1991 「最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—」『国立歴史民俗博物館研究報告』36 : 195-238
- 品川欣也 2003 「器種と文様, そして機能の相関関係にみる大洞 A 式土器の変遷課程」『駿台史学』119 : 97-134
- 島田祐悦編 2014 『十文字遺跡・宮下遺跡』横手市文化財調査報告書29, 横手市教育委員会
- 杉沢昭太郎編 2017 『千鶴IV遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書663, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』工芸美術研究会
- 鈴木正博 1985 『「荒海式」生成論序説』『古代探叢II』早稲田大学出版会, 83-135
- 鈴木正博 1987 「続大洞 A<sub>2</sub> 式考」『古代』84 : 110-133
- 鈴木正博 2003 「「遠賀川式」文様帯への型式構え—埼玉における「綾杉文系土器群」の位相と「綾杉文系土器群」への「文様帯クロス」—」『埼玉考古』38 : 3-23
- 須藤 隆 1997 「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89 : 44-82
- 須原 拓・亀澤盛行・濱田 宏・石崎高臣編 2007 『本宮熊堂 A 遺跡第26・29次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書502, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 関根達人編 2022 『国史跡山王冨遺跡の研究Ⅲ土器編1 (西区3層・4上層出土土器編)』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
- 関根史比古 2021 「浮線文土器群における沈線文技法—綾杉文から三角連繫文へ—」『靱』10 : 111-120
- 芹沢長介 1960 「亀ヶ岡式土器」『石器時代の日本』築地書館, 197-223
- 草間俊一 1974 「縄文晩期の文化」『水沢市史』水沢市教育委員会, 157-163
- 高瀬克範 2000 「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83 : 61-96
- 高橋龍三郎 1993a 「大洞 C<sub>2</sub> 式土器の細分とネガ文様」『二十一世紀への考古学 櫻井清彦先生古希記念論文集』雄山閣, 219-232
- 高橋龍三郎 1993b 「大洞 C<sub>2</sub> 式土器細分のための諸問題」『先史考古学研究』4 : 83-152
- 溜浩二郎編 1998 『大宮北・本宮熊堂 A 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書281, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 千葉 悟 2009 『不動1遺跡』花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書8, 花巻市教育委員会
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』未来社
- 中村五郎 1990 「①大洞 A<sub>2</sub> 式土器をめぐる」『荒屋敷遺跡II』福島県会津若松建設事務所・三島町教育委員会, 256-258
- 根岸 洋・小久保竜也・西村広経 2022 「秋田県湯沢市鏡田遺跡・山田中学校グラウンド遺跡採集資料について」『秋田考古学』66 : 1-16
- 平井 進編 1992 『上八木田3・4・5遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書177, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 平山久夫・安藤幸吉・中村五郎 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3 : 59-80
- 藤村東男編 1977 『九年橋遺跡 第3次 調査報告書』北上市文化財調査報告書18, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1978 『九年橋遺跡 第4次 調査報告書』北上市文化財調査報告書23, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1979 『九年橋遺跡 第5次 調査報告書』北上市文化財調査報告書25, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1980 『九年橋遺跡 第6次 調査報告書』北上市文化財調査報告書29, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1984 『九年橋遺跡 第7次 調査報告書』北上市文化財調査報告書35, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1985 『九年橋遺跡 第8次 調査報告書』北上市文化財調査報告書42, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1986 『九年橋遺跡 第9次 調査報告書』北上市文化財調査報告書42, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1987 『九年橋遺跡 第10次 調査報告書』北上市文化財調査報告書44, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1988 『九年橋遺跡 第11次 調査報告書』北上市文化財調査報告書47, 北上市教育委員会
- 藤村東男編 1991 『九年橋遺跡調査報告書第10次 (補遺)』北上市文化財調査報告66, 北上市教育委員会
- 星 雅之・阿倍勝則編 1998 『本内2遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書271, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 本多準一郎・金子佐知子・吉田 充編 2004 『本宮熊堂 A 遺跡第17次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書453, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財セ

ンター

- 光井文行・玉川英喜編 1991 『上川岸2遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 153, 岩手県  
文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村上絵美・米田 寛・山川純一・白戸このみ編 2020 『杉の  
堂遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化  
財調査報告書 716, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財セン  
ター
- 八木勝枝・新井田えり子・吉田真由美編 2006 『大橋遺跡発  
掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告  
書 481, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 山内清男 1967 [1930] 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土  
器の終末」『考古学』1 (3) : 139-157
- 山内清男 1964 「文様帯系統論」『日本原始美術 1 縄文式土  
器』講談社, 157-158
- 山本悦世編 1992 『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調  
査報告5, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

図版出典

図1 品川 (2003) を改変

図2 国土地理院地理院地図より筆者作成

図3 筆者撮影

図4 筆者作成

図5 1-4: 藤村編 (1988)、5・6: 藤村編 (1987)、7-17:  
小玉ほか編 (1983)

図6 1-5: 藤村編 (1988)、6-8: 藤村編 (1986)、9-19:  
小玉ほか編 (1983)

図7 1-7: 藤村編 (1987)、8-14: 藤村編 (1988)、15-  
22: 須原ほか編 (2007)

図8 藤村編 (1980, 1984, 1985, 1986, 1987, 1988) をもと  
に筆者作成

図9 鈴木 (2003) の記述をもとに作成 1-4・6: 藤村編 (1988)、  
5: 藤村編 (1987)

図10 筆者作成

図11 1: 藤村編 (1977)、2: 藤村編 (1979)、3: 八木ほか編  
(2006)、4・5: 岩渕ほか編 (2002)、25: 杉沢編 (2017)

図12 1a: 藤村編 (1977)、1b・4b・5b・6b・7b・9b: 筆者作  
成、2・5a: 小玉ほか編 (1983)、3: 村上ほか編 (2020)、  
4a・7a: 藤村編 (1988)、6a・6b: 根岸ほか (2022)、8:  
小野ほか編 (2021)、9a: 藤村編 (1987)



## **A Re-examination of Chronology for the Ohora A Type Pottery in the Kitakami River Basin**

Tatsuya KOKUBO

While the previous studies of Ohora A type pottery in the Kitakami river basin were based on the finding in the dumping grounds of Kunenbashi site, any assemblages excavated from the specific remains of Kunenbashi site and Motomiyakumado site were not used for them. Therefore, discrepancies between the ceramic assemblages of these sites and the existing chronology of this type have become apparent. In order to solve this problem, this paper reexamines chronology for the Ohora A pottery in the target area with a focus on incision technique, resulting that I subdivide it into three phases. Because they are consistent with the distribution pattern of each archaeological remain, some differences can be clarified from the previous studies. Next, I propose three subtypes of the arrow tailfeather-shaped incised pattern (TSIP), which was regarded as of Ohora A type originally, and examine the accompanying materials and decoration motifs of them. Consequently, I assume that each subtype of TSIP has different typological sequence from the Ohora C<sub>2</sub> phase to Early Yayoi phase, while there is a common typological process such as highly-densification in the latter phase.